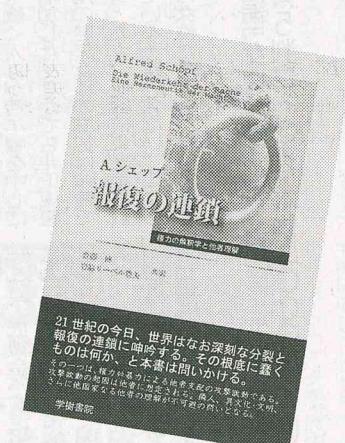


報復の連鎖

権力の解釈学と他者理解
2・20刊 四六判390頁 本体3500円
学樹書院



ヨーロッパの哲学史、特に解釈学の伝統の中に 他者理解という問題解決の可能性を見出す

具体的な社会領域へと考察を広げながら、理解という実践的な要請のもとに思想史を組みなおす

堀内進之介

権力といふ言葉が意味することは論じる人によって様々である。本書の著者は、権力を他者理解そのものの中に見出す。どういうことか。人が権力を求める時には、他人とのかかわりにおいて、暴力的危うさが常につきまとつ。しかし、その場合、人が向き合っていると思っている他者とは誰なのか。むしろ、他者が何者であるかが分からぬいからこそ、人は暴力的な支配への誘惑に身を委ねてしまうのではないか。もしも、そうだとすれば、問われなければならないのは、他者に関する知識=他者理解という問題だ。

人間がどこまで取り組むことができたのか、あるいはできなかつたのか、そして、問題を解く糸口がどこにあるのか、ということだろう。「理解の問題には、他者への関係を暴力沙汰で解決するか、あるいは他者を認め評価する関係をつくるか、を解くための鍵が隠されている」(139頁)のだ。

本書はヨーロッパの哲学史、特に解釈学の伝統の中に他者理解という問題解決の可能性を見出す。だが、解釈学の中でも他者理解の問題への態度は様々だ。著者によれば、ハイデガー、そしてそれに続くカダマーは、他者理解から他者が欠落した理解モデルを立ててしまった、という。彼らにとって理解とは、「個人の実存」あるいは「共感と友情の紹介」に行きつく嘗みでしかない。著者はそうした態度に満足しない。彼が、解釈学の伝統の中で高く評価するのG·H·ミードの議論だ。ミードは、人が他人と出会つたときに、相手の視点に立

うことの重要性を指摘することは、論じる人によって様々である。本書の著者は、権力を他者理解そのものの中に見出す。どういうことか。人が権力を求める時には、他人とのかかわりにおいて、暴力的危うさが常につきまとつ。しかし、その場合、人が向き合っていると思っている他者とは

誰なのか。むしろ、他者が何者であるかが分からぬいからこそ、人は暴力的な支配への誘惑に身を委ねてしまうのではないか。もしも、そうだとすれば、問われなければならないのは、他者に関する知識=他者理解という問題だ。

これはミードだけの問題に過ぎない。著者は多くの思想家の間の理論的な緊張関係の背後に、普遍化された他人の理解をめぐるミードの議論の危うさを指摘する(1章)。

これはミードだけの問題に過ぎない。著者は多くの思想家の間の理論的な緊張関係の背後に、普遍化された他人の理解をめぐるミードの議論の危うさを指摘する(1章)。

以上のようにみると、本書の意義は、解釈学の伝統から具体的な社会領域へと考察を広げながら、理解という実践的な要請のもとに思想史を組みなおしたことにあるといえよう。この時代は、個人の理性の力を称揚する一方で、その時代の希望と困難を重ね合わせることで、むしろ主体の可能性を秘めていた(13頁)ともいえる。だとすれば、権力が人間社会に対して大いなる危険を秘めているのを認めざるを得ないとしても、だからこそ、権力の解釈学=他者理解という問題の及ぶ射程は、近代社会において主体であり、他者を認めるための可能性の一つとして理解されるべきだろ。限られた思想家を取り上げることで、「理解」についての思想史的な解明がどれほど達成されたのかという人がいるかもしれない。だが、それは、他ならぬ読者自身にとっての実践的な課題でもある

カントやデリダ(Ⅱ章)、無知のベール、原初状態という方針論にもとづき、私、汝とは別の位置にある正義を直截的に掲げたロールズと、そうして第三項の可能性を認めながら、他者からの要求に常に狼狽せざるをえなかつたレヴィナス(Ⅲ章)。だからこそ、二元的視点と三元的視点をともに重視するミードの「遠近法」ということを忘れてはならない。われわれの日常生活に潜む暴力的な関係にはじまり、テロや紛争といった直接的な力の行使、そしてそれへの処方箋に至るまで、他者理解の領域へと検討を進める。い射程をあらためて問い合わせた元の領域も、人が、男女、ずの領域も、人が、男女、ために必携の一冊。